＊本資料は、八五年までにおこなったもので、この段階では、まだ、現在使っている文図ほどはっきりとしたものはなかった。文図にしているものは、現段階（〇七年）のものである。また、言語学的な資料等も、当時のものであって、現在では、若干の訂正や発見もあるものもある。

①これは、私（わたし）が小さいときに、村の茂平（もへい）というおじいさんからきいたお話です。

語彙的・文法的意味・構造

・これは＝指示代名詞（こそあど）近称

指示代名詞は、話してとの関係で「近称（話し手に近い）」「中称（聞き手に近い）」「遠称（どちらからも遠い）」「疑問称（わからない）」にわけられ、指し示されるものは「もの・ことがら・場所・方向」によって、「これ・こいつ・ここ・こちら・こっち」のように使われる。形容詞的には「こんな」、副詞的には「こう」と用いられ、指定「この」の形は形容詞形だが、特に連体詞と呼ばれる。

近称の用い方には、次の三つが挙げられる。

1，話し手（書き手）の近くにあるもの。話し手自身やそれの近くにあるもののようすをさす。

・これは、きみの　手紙ですか。

・ここの温泉は、少しぬるいそうです。

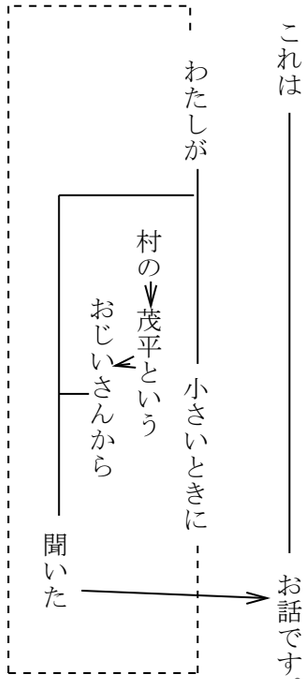
・この間、こんな大きな鯛がつれた。

2，話し手がすぐ前に言ったことをさす。

・以上でわたしの話は終わります。みなさんは、これをどう思いますか。

3，次に言おうとすることをあらかじめさす。

・これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。



指導の要領・留意点

○　この文は、作品全体のわくづけのはたらきをしていて、その意味で、独立している。だが、その構造的な意味には深入りできないので、子の話が「聞いた話」だということ、それを聞いた時が「わたしが小さい時」だったこと、そして、その話をしてくれたのは、「村の」「茂平という」「おじいさん」だったことをとらえさせ、それらのことについて、子どもたちの感想や意見を述べさせる程度にしたい。

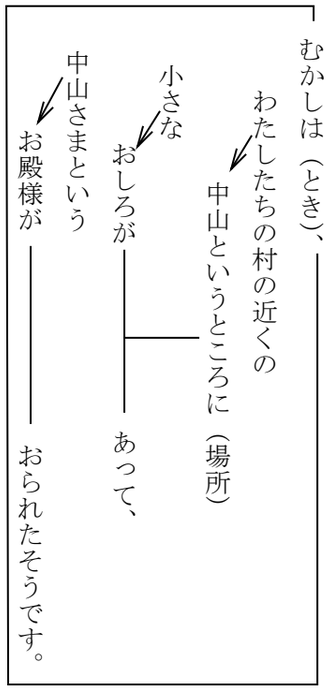
・これは　ー　こそあどは、文字通り「指し・示す」という代名詞で、会話活動では、指で指す動作をともなうのが典型的だろう。読みの活動でも、多くが指示する内容がすでに提示されている場合が多く、指導にあたっては、提示されている単語・文・段落をさがして、そこに棒線をつけるとか囲みをするとかの作業が重要だ。

ここでは、指し示すことがらがまだ提示されておらず、しかも、作品全体であるという点で、特徴的である。また、じょうだんに示すように、典型的な用法になっている。次に言おうとすることを、あらかじめ指しているのだ。この文の主語であり、その述語は「お話です。」

・わたしが（主）は、二つの述語をもつ。①は、「小さい」で、②は、「聞いた」だ。「わたしが、村の茂平というおじいさんからお話を聞いた。」のが「わたしがー小さいとき」だったことを示す。

・このわくは、①聞いた話　②それも、小さいときだった、というぼかしの性格と、村の老人だった茂平という具体的固有名詞で示されるある種の確実さとが共存して、わくづけをしているわけだ。

② むかしは、私たちの村のちかくの、中山（なかやま）というところに小さなお城があって、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。



〇前文のわくづけを受けた説明的な役割をになう。いわば話の舞台が出されている。

・むかしは＝ここに示されている「は」は、子どもが主語と誤認しやすいタイプで、「むかし」と、「はだか格」で示された「とき」とは、かなりちがった役目を果たしているように見え、差しだし的だ。だが、主述の対応をとらえなおすと、上の文図のように舞台がはっきりと浮かびあがってくる。

・村の茂平というおじいさんが話した内容に入っているのだが、

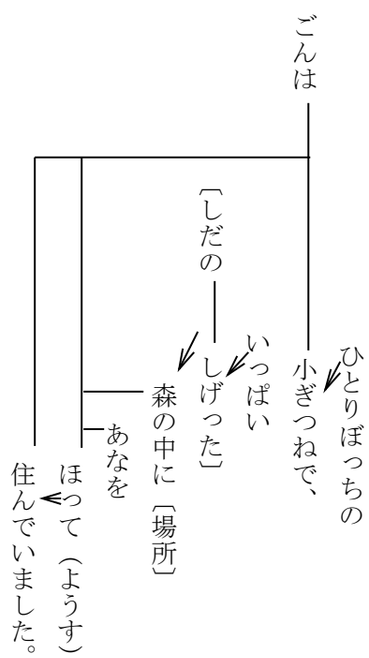
・むかしは ーとりたての形（対比のとりたて）
この形は、基本的には、名詞で指し示されるものを現実の同類のものごと（文脈・場面によって示されていたり、たんに暗示されていたりする）との対比においてあらわすはたらきをする。

ぼくは、朝、パンを食べる。
ぼくは、朝は、パンを食べる。
ぼくは、朝も、パンを食べる。
（格のとりたての形、とき）

・おられたそうです ー（むすび）人から聞いたことで、まだたしかめていないことを知らせるときには、述語に「そうだ」をつけくわえます。（伝聞＝伝え聞き）

③　その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐（ぎつね）」という狐がいました。　④ごんは、一人（ひとり）ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。

・ひとりぼっち＝たった一人。仲間などいないこと。ひとりぼっち。「ーの身の上」「ーで留守番をする」「親が死んで、ーになる」
・小ぎつね＝（接頭）①小さい、少ない、細かいなどの意を添える。「ー人（石、人数、銭、雨）」「ー当たりに当たってみる」②数量があるものに少し足りないが、ややそれに近いことを表す。ほとんど、約。「ー一時間」③軽蔑の意味を添える。「ー倅」「ーざかしい」
・住んでいました＝～しているの形。動詞のアスペクト。結果の状態を表す。



⑤そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。⑥はたけへ入って芋をほりちらしたり、菜種（なたね）がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家（ひゃくしょうや）の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、いったり、いろんなことをしました。

・「でも」のとりたての形　①一部の例をあげて、ほかのばあいも同様であることを表す。「立っているものは、親でも何でも使った」「この前、この市に来たときは、夜でも、みんなが歌を歌って、町はにぎやかだった」②疑問詞とともに全部のこと

彼の目でのむかしを指しているのだろう。そして、そのころ、まだお殿様がいるという、そのくらいのむかしだ、ととらえられる。

○小さなお城があり、殿様は中山さまといわれていた、という状況は、さして山奥ではなく、もちろん都市でもない。小さなまとまりをもった独立性のある小宇宙で、ここではいかにも子の話がありそうなふさわしい舞台が示されている。だが、一次読みの段階では、深入りすることができない。

○主人公の登場だ。まだ、話は始まっていない。前の文に続く説明的な役割を受けもっている。
・その中山＝お城のある中山、さすことばだから、園にあたる前の文に傍線を引かせ、確かめさせる。
・きつねがーいた。その名を「ごんぎつね」といい、住んでいる場所が示される。ことがらは、きちんととらえられる。
・「ごんぎつね」＝この舞台にもたくさんきつねは存在しそうで、固有名詞を使っているところから、特に、その存在が人々に知られていることがわかる。いわば、有名人だ。その理由が、読みの動機を強化する。

○文④は、そのごんぎつねについてのべる。ごんは、とさし出し、①小ぎつねだ、②住んでいた、と二つの述語を用い、その身の上と、すみかを示す。
・ひとりぼっちの小ぎつね＝身寄りのない、孤独な身の上で、たったひとりで、という情感と軽蔑の小ぎつねとはうまくあわない。小さいという小であろうか。
・しだのいっぱいしげった森の中にあなをほって＝すみかを具体的に示す。ようすはよくわかる。ひっそりと住まねばならない状況は、彼の行動に投影されることになる。

○文⑤の具体的な内容を文⑥で示す。すべて主語が省かれているが、もちろん「ごんは」である。
・（ごんは）ーいたずらばかりした。このばかりは限定を表す。いたずら以外はしなかったほどだ。そして、いたずらのときが、夜でも昼でも、つまり、四六時中で、その場所が、辺りの村だ。

を表す。「口では、どんな大きなことでも言える」③軽く例示する。「お茶でも飲もうか」「ちょっと、散歩にでも行ってくるよ」

・「でも」は、格のとりたてとして、「は・も・こそ・さえ・しか・すら・だけ・ばかり・など・まで」などとともに用いられるほか、逆条件の形にも用いられる。「いくら頑固者でも、子どもにはかなわない」

・ほり散らす＝ほる＋散らす

・菜種がら＝油をとるための菜種（油菜）の収穫後、とうの立った丈の高い茎をほして燃料にするもの。

・とんがらし＝調味料にするとうがらしをさす。この場合、実をもがず、株ごと干していることがわかる。

・「ばかり」のとりたての形　①大体の量を示す。「一週間ばかり旅行に出かける」　②範囲を限定する。「メロスは、胸のはりさける思いで、赤く、大きい夕陽ばかりを見つめていた」

・たり＝いろんな動きをならべたてるときには、動詞のならべたてる形を使う。そのばあい、文のおしまいに動詞「する」をおいて、きもちやときを表す。そこへ出てきては、いたずらをした。その代表例が、つづいて示される。

・いもをほり散らす＝いもをほる
　いもをほりちらす　└　いたずらのようす

・菜種がら～百姓にとっては、大切な燃料だし、たいそうよく燃える菜種がらに火をつけると、百姓たちが仕事をやめて、消火に走らなくてはならない。かなり悪質ないたずらだ。

・とんがらしをむしりとったり～唐辛子は、冬のつけ物などに不可欠なものだ。むしりとる＝むしる＋とるで、動作の荒っぽさがわかる。

・たり、たり、いろんなことを～二つ以上の動作、作用をならべて述べる場合、一つの動作、作用を例としてあげる場合（人の悪口を言ったりするな）とがあり、ここでは前者、その上、いろんなことをしたとあって、まだまださまざまないたずらをしたことがわかる。

○ここでは、一般的評価が示されている。名の知れたいたずら者だ。そして、こんなことをする、といういわば烙印づけがここでは大切だ。